マニトー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マニトー

【Ｎコード】

Ｎ５４１３Ｎ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

デトロイトに出る様々な種類の動物達。彼等はどれも人を襲うがその秘密は。マニトーとはネイティブアメリカンの伝承に残る邪悪な精霊のことです。

第一章

マニトー

デトロイトでだ。今不気味な噂があった。
人が次々と襲われている。しかもだ。
その相手が最も嫌いな、苦手な相手に襲われる。そうしたことが続いていた。
「ジョーンズは蛇に襲われたのか」
「ああ、それも二十メートルはある大蛇にな」
こんな話がされていた。
「襲われたんだよ」
「おい、あの蛇嫌いにそれはきついな」
「そうだな」
「それでバーナードは蝿だ」
彼はそれだというのだ。
「蝿に襲われたんだ」
「蝿に？」
「それになの」
「そう、蝿にね」
それだというのである。
「何億もいる蝿の群にな」
「きついな、それも」
「あの虫、特に蝿が苦手な奴にか」
「何億もか」
「身体中にまとわりつかれてな。気付いた時にはな」
こう話されていく。皆固唾を飲んで話を聞いている。
「もう泡吹いて倒れていたらしいな」
「ショック死しなかっただけでもましか」
「だよな」

「それでだ」
さらに話は続く。
「ハドソン婆さんは黒猫に襲われグレゴリー坊やは犬に襲われた」
「誰かが嫌いなものそれぞれにか」
「誰か嫌がらせしてんのかよ」
こんな話も出た。
「だとしたら誰だよ」
「殺人事件じゃないにしろ悪質だよ」
「だよな」
それが新聞やネットにも出て来ていた。とにかく不穏な話がデトロイトに満ちていた。そしてその中でだ。警察も遂に無視できなくなった。
身長二メートルはある黒人の初老の男が警官のスーツに身を包んでいた。その彼が署長の席に座りだ。これまたいかつい感じの二人の黒人のスーツの男達に話していた。
見ればだ。一人の顔には火傷の跡がありもう一人の顔は何かに殴られた様子にグロテスクに歪んでいる。署長でありその大男は二人に対して言っていた。
「君達には一連のこの不気味な襲撃事件の解決を頼む」
「愉快犯の可能性があるからですね」
「それでなんですね」
その二人の黒人の男達が署長に対して応えて言う。
「そうだ、それでだ」
「まあ妖怪だろうが悪魔だろうがです」
「街の平和を乱すならですね」
二人はそれぞれ言う。
「俺達が容赦しませんし」
「このキングコングとフランケンシュタインが」
「その通り名はややこしいな」
署長は一人のあまり上手いとは言えないジョークに真顔で返した。

「少しな」
「じゃあ名前で御願いします」
「それで」
二人は署長の言葉を受けて今度はジョークなしで返した。
「とりあえず何でもいいですから」
「それで」
「ではエド＝グリーン警部、ジョーンズ＝ブルー警部」
名前で呼んできたのだった。
「これでいいか」
「ええ、じゃあそれで御願いします」
「名前で御願いします」
素っ気無くそれに返した二人だった。
「まあそういうことで」
「呼び名はそれで」
「わかった。ではグリーン警部にブルー警部」
今度は姓での呼び方だった。どちらも色である。
「今回の事件は君達に一任する」
「つまり好きなようになっていいってことですね」
「俺達の」
「そうだ、この署きっての敏腕刑事である君達にだ」
二人のそのいかつい顔を見てだ。そのうえでの言葉だった。

第二章

「頼みたい。いいか」
「わかりました、それじゃあ」
「必ず解決しますから」
こうしてだった。デトロイトで最も恐れられているこの二人が事件の捜査と解決にあたるのだった。そして二人が街に出るとであった。
「うわ、出た！」
「あの二人か！」
「キングコングとフランケンシュタインだ！」
「逃げろ逃げろ！」
誰もが二人の姿を見て逃げ去っていく。まさに蜘蛛の子を散らすかの様であった。
こうして二人の前には誰もいなくなった。後には風が吹くだけだった。
しかし二人はだ。その誰もいない道を通ってだ。そうして言い合うのだった。
「とりあえずあの連中じゃないな」
「ああ、俺達の姿を見てそそくさと逃げるようじゃな」
「今回の事件の犯人じゃないな」
「そうだな」
このことをお互いに確かめるのだった。
そしてだ。まずは聞き込みだった。馴染みのバーに入る。
そこのマスターは初老の白人のマスターだ。白いシャツに黒いベストとズボン、それに蝶ネクタイという格好だ。デトロイトはアフリカ系が多いがそれでも白人もいる。アメリカは色々な人間がいる国家だ。
その親父がだ。二人の話を聞いてだ。こう言って首を捻るのだっ

た。
「あの事件のことはな」
「わからないのか」
「あんたもか」
「誰が襲われたかは知ってるさ」
カクテルを作りながらの言葉だった。
「それはさ。けれど犯人がどうかっていうと」
「それはわからないっていうのか」
「どうしてもかい」
「わかったらもうあんた達に教えてるさ」
そうだというのである。
「とっくにさ」
「それでか」
「ああ、それでだよ」
言いながら二人にそれぞれカクテルを出す。見ればどちらもブラッディマリーだ。それを出してそのうえでその二人に対して言うのだった。
「サービスだよ」
「馬鹿言え、そんなの受けられるか」
「全くだ」
カウンターに座る二人はそれには憮然として返した。
そしてだ。二人共それぞれコインを出してだ。そうしてまたマスターに告げた。
「ほら、金は払う」
「ちゃんとな」
「サービスだって言ってるんだがな」
「俺達は刑事だ。法律は守る」
「金もちゃんと払う」
二人は真剣そのものの顔で応える。
「だからだ。これは受け取ってくれ」

「受け取らないと飲まないからな」
「相変わらず真面目だね。やってることは滅茶苦茶だってのにな」
マスターはそんな意固地とも見える二人に少し苦笑いを浮かべて返した。
「法律は守るんだ」
「俺達は俺達のやり方で住みよい街を作ってるんだ」
「それだけだ」
あくまでそれだけだというのだ。
「それで悪事なんかするか」
「法律は守るからな」
また言うのだった。
「それはちゃんとな」
「しっかりと守るからな」
こう言ってだった。マスターが金を受け取ってからカクテルを飲む。そのカクテルは二人にとっては満足のいくものだった。それを飲んでまた言うのだった。
「で、だ」
「あんたは知らないんだな」
「ああ、悪いな」
あらためて事件の話になる。そうしてだった。
二人はここでだ。さらに話すのだった。
「それじゃあ手掛かりを知ってそうな奴は知ってるか？」
「そういう奴はだ」
「さてな。そう言われてもな」
マスターは首を傾げながら言う。
「いることにはいるんだがな」
「何、いるのか」
「ちゃんといるのか」
「ああ、いることはいるんだよ」
それはしっかりと答えが返ってきた。

第三章

「ただな。そいつがな」
「そいつが？」
「どうかしたのか」
「ネイティブでな」
所謂インディアンである。この国の原住民である。
「言葉がわかりにくいんだがな」
「英語は喋れるんだな」
「それはいけるな」
二人はとりあえず言葉がわかりにくいのは無視した。そうしてそのうえでまたマスターに対して問うた。英語が喋れるかどうかをだ。
「それか英語読めるか？」
「どっちだ？」
「一応話せるし読めるさ」
マスターはどちらもいけるのだという。
「しかしな。わかりにくいんだよ、これが」
「わかりにくいならいいさ」
「意味が通るんならな」
二人はそれでいいというのだった。それについてはだった。
「それでいい」
「じゃあ紹介してくれ」
「わかったよ、じゃあここに行ってくれ」
さっとペンとメモ用紙を出して書いてだった。それを差し出してきた。
そこには住所があった。二人はそのブラッディマリーを飲み終えるとそこに向かった。そこはスラムの裏手だった。そこに入ったのである。
スラムは寂れていた。そして荒れた雰囲気に満ちていた。二人は

その中を進んでいく。やはり誰もが彼等を見てすぐに逃げていく。
しかし二人はここでもそうしたことを意に介さずその書かれている住所に向かう。辿り着いたそこはある廃墟に近いビルの二階だった。そこはマンションだった。
そのマンションの二階の扉をノックする。すると非常に訛りの強い言葉が返って来た。
「誰じゃ？」
「デトロイト市警の刑事だ」
「いいか」
こう扉の向こうのその訛りの強い声の主に告げる。扉の周りはあちこちひび割れていてしかも階段もその手すりもぼろぼろだった。その中に今いるのだった。
そしてそこにいてだ。あらためて告げたのである。
「話を聞きたい」
「是非共だ」
「あのことかのう」
よく聞けば老婆の声だった。かなり皺がれたものだった。
「やはり」
「おい、今の言葉はだ」
「まさかあんた」
「中に入るかい？」
二人に対しての言葉になっていた。
「それだったら」
「こっちからそうさせてもらう」
「その為に来たからな」
グリーンとブルーはすぐに応えた。
「むしろだ。無理にでも話を聞かせてもらう」
「いいな」
「わかっておる。それではじゃ」
扉が開いた。そうしてだった。

二人はその部屋に案内された。するとそこには赤い顔で彫の浅い顔の黒い髪の老婆がいた。その服はみすぼらしく背中は曲がっていた。その彼女だった。
「さて、わしのことは聞いておるようじゃな」
「インディアンの婆さんだな」
グリーンがその老婆をじろりと見ながら言った。
「そうだったな」
「その通りじゃ。名前はマゾロカという。姓は適当なものでな」
「適当？」
「わしの部族には名前だけがあった」
それだけだというのだ。
「姓はあんた達に適当に貰ったものじゃ」
「適当か」
「そうじゃ、適当じゃ」
こうブルーに返すのだった。

第四章

「わしの姓は確かリーとかいったな」
「リー婆さんか」
「まあマゾロカでもリーでもどっちでもよい」
老婆は呼ばれ方についてはどうでもいいというのだった。
「それではじゃ。まあ話じゃな」
「それだ、話がわかっているならだ」
「聞かせてもらうからな」
二人は少し強引に言った。そしてだった。
老婆が勧めた席にそれぞれ座って話を聞くのだった。勧められてそれに応えたのは席だけだった。出されたコーヒーには手をつけようとはしなかった。
老婆はそれを見てだ。表情を変えずに言ってきた。
「コーヒーは飲まんのか」
「食い物や飲み物は受け取らん」
「そうしたものはな」
「では御礼とかもか」
「それもいい」
「そうしたものは絶対に受け取らないことにしている」
厳しい声で言う二人だった。
「そういうことだ」
「わかったな」
「では後でわしが飲むとしよう。それでじゃ」
老婆は二人のその話を聞いてだ。そのうえで言うのだった。
「話はあれじゃな。最近起こっている事件のことじゃな」
「誰もが自分が一番嫌いなものに襲われている」
「そのことだ」
まさにそれだった。そのことについて問うのだった。

「何だ、あれは」
「知っている様だが」
「マニトーじゃ」
それだと。老婆は言った。
「あれはマニトーじゃな」
「マニトー！？」
「何だそれは」
二人の刑事はそのマニトーという言葉を聞いてだ。怪訝な顔になって問い返した。
「妖怪か、それとも悪魔か」
「何だ？妖精か？」
「強いて言うなら悪霊じゃな」
それだと言う老婆だった。
「言うならな」
「悪霊か」
「それなのか」
「そうじゃ、それじゃな」
二人に対して話を続ける。
「わし等の中に伝わる悪霊でじゃ。人の心を読む」
「そしてか」
「そして人の心を読んでか」
「それで襲うのじゃよ」
こう話すのだった。
「酷いものになるとそれで殺すこともある」
「殺すだと！？」
「それは許せんな」
殺しという言葉が出るとだった。二人の顔色が一変した。只でさえ怖いその二つの顔がだ。さらに恐ろしいものになってしまったのである。
「だとすれば余計にだ」

「すぐに捕まえるぞ」
「ふむ。左様か」
「当たり前だ、俺達は刑事だ」
「悪党を捕まえるのが仕事だ」
怒った声で返したのだった。
「それもだ」
「だからだ、いいな」
「そうか。刑事だったのか」
老婆は話を聞いてまた頷くのだった。
「そういえばそう見えんこともないのう」
「他の何に見える？」
「俺達は刑事以外の何に見える」
「最初はタチの悪い探偵かと思ったがのう」
そうだというのだった。老婆の顔はここでは少し笑っていた。
「違ったのじゃな」
「当たり前だ、俺達は刑事だ」
「探偵とはまた違う」
二人は胸を張って言うのだった。

第五章

「元々はそのギャング担当だったんだがな」
「色々あったしな」
その顔での言葉だった。
「俺は顔に硫酸をかけられたことがあったしな」
「俺はいきなり囲まれて銃の柄で殴られまくってこれだ」
グリーンとブルーは老婆にそれぞれ話すのだった。
「まあその後でギャングの奴等は全員ノックアウトしてブタ箱にぶち込んだがな」
「反撃で囲んだ奴等全部叩き潰したぜ」
「随分と荒っぽい捜査をしておるのじゃな」
老婆は二人の話を聞いてこう思ったのだった。
「どうやら」
「それは否定しないさ」
「俺もだ」
グリーンもブルーも笑って返す。
「事実だしな、それは」
「それが俺達のやり方だ」
「ふむ、左様か」
老婆は二人の話をここまで聞いたうえで頷いたのだった。
「そのあんた達がマニトーの相手じゃな」
「で、あんたは今度の事件の参謀になるな」
「それでいいな」
「うむ、マニトーは放っておいては大変なことになる」
老婆の顔がここで真剣なものになった。
「それではじゃ」
「よし、話はこれで決まりだな」
「捜査に協力してもらうぞ」

「そうさせてもらう。それではじゃ」
こうして二人は老婆を味方に引き入れることに成功した。二人は早速街に出ようとする。しかし老婆はそれについて行こうとはしなかった。
部屋の中に留まったままだった。動こうとはしないのだった。
二人はその老婆に対してだ。怪訝な顔で言うのだった。
「あんたは来ないのか？」
「同行しないのか」
「歳でのう。あまり激しく動けんのじゃよ」
年齢のせいだというのだった。
「悪いがな」
「そうか、それならいい」
「安楽椅子型の探偵でもな」
それでいいというのだった。二人もそれは認めた。
二人はそのまま行くことにした。老婆はその二人に対してまた言ってきた。
「携帯はあるな」
「ああ、それはな」
「勿論だ」
それぞれ懐からその携帯を取り出して彼女に見せてみせた。
「それはな」
「あるがな」
「ではそれで連絡してじゃ」
それでいいというのだった。
「それでいいじゃろう」
「よし、それじゃあそれでな」
「俺達はやらせてもらうぞ」
こうしてだった。二人は街に出て捜査をはじめた。老婆は部屋の中にいたままだ。二人は街に出て道を歩きながらだ。そのうえでこんな話をするのだった。

「インディアンか」
「どうしたんだ？」
ブルーがグリーンの言葉に問うた。
「いや、俺はそっちはあまり知らないからな」
「そうか」
「ああ、しかも非科学的だな」
グリーンはこのことを気にしていた。警官というものは科学に基づいて捜査をしなければいけない、それが近代における警察のあり方だからだ。
「かなりな」
「それはそうだな」
「しかし。今度は違うか」
また言うグリーンだった。
「それはな」
「そうだな。しかしそれで事件が解決するのならそれでいいんじゃないのか？」
「それでいいか」
「事件が解決するならそれでいいだろ」
この辺りは合理的というか割り切っているブルーだった。
「それでな」
「それもそうか」
「俺はそう思うぜ。それでだ」
「ああ」
「婆さんからメールが来たぜ」
早速であった。ブルーはここで自分のメールを出してみせた。そこにはしっかりとメールがあった。それを彼に対して見せるのだった。

第六章

「これな」
「それか」
「ああ、ここから工場地帯に行けってことだ」
こう彼に話すのだった。
「そこにな」
「工場の方にか」
「そこに行こうぜ」
「わかった。それじゃあな」
こうして二人は工場地帯に向かった。デトロイトは自動車産業において有名な街だ。その工場地帯は行き交う青やカーキ色の服の労働者達が行き交っている。あちこちに大きく生えている煙突達から煙が出ている。工場からもひっきりなしに音が出ている。
そしてだ。ここでだった。
ふと二人の目の前にだ。大勢のギャング達が出て来た。その連中の顔を見るとだ。
「おいおい、御前等」
「何でここにいるんだ？」
二人はその柄の悪い連中の顔をよく知っていた。
グリーンの顔に硫酸をかけた奴もいればブルーを銃の柄でしこたま殴った面々もいる。しかし彼等は全員二人に逆にノックアウトされて刑務所に叩き込まれている筈だった。それでもだった。
「脱獄してきたとかじゃねえな」
「じゃあ何だ？」
ここでグリーンの携帯が鳴った。そしてだ。
それを取るとだ。老婆が出て来てだ。そして言うのだった。
「出て来たようじゃな」
「出て来たっていうと」

「この連中か」
「ああ、そうじゃ」
また言うのだった。
「その通りじゃ」
「マニトーか」
「この連中がそうなんだな」
「マニトーは人の心を読める」
老婆はこのことも話してみせた。
「それであんた達の最もじゃ」
「へえ、俺達にもそんな感情があったんだな」
「成程な」
二人がそのいかつい顔を笑わせて話したのだった。
「それでだ。どうすればいいんだ？」
「それで」
「倒すことじゃ」
老婆の返答は素っ気無いものだった。
「わかったな」
「それで終わりか？」
「そんな簡単な事件なのか？」
「無論それで終わりではない」
また二人に言う老婆だった。携帯の向こうからの言葉だ。
「これからがある」
「ああ、やっぱりそうか」
「あるんだな」
二人はそれを聞いてまた言うのだった。
「しかしとりあえずこの連中を叩きのめせっていうのか」
「それなんだな」
「できるか？」
老婆はそれを問うた。二人が周りの連中を許せるかどうかだ。
「それで」

「やってみるさ」
「俺達にもそんな感情があったのが不思議なんがな」
あえて悠然と笑ってだ。そしてであった。
それぞれ銃を出してだ。携帯の向こうの老婆に話した。
「銃でもいいな」
「拳とか足でも効くか？」
「うむ、攻撃は何でもいい」
それでもいいというのである。
「何でもじゃ」
「そうか、それならだ」
「やってやるか」
言ってすぐそばにだった。二人はすぐに銃を放った。それでまずは二人程倒す。そしてそれから襲い掛かって来た彼等を返り討ちにする。その強さはかなりのものだった。
迫る敵を一気に倒した。殴り蹴りだった。
銃も放つ。硝煙の匂いが辺りを覆う。その中で残ったのは二人だけだった。周りには倒れ伏す面々だけが無様に転がっているだけだった。

第七章

だがそのギャング達の姿が消えていく。まるで煙の様にだ。
そして一匹の蛇の様な不気味な黒い生き物が出てだ。そうしてだ。
それが何処かに逃げていく。ここでまた携帯から老婆の声が聞こえてきた。
「逃げたな」
「じゃああれがマニトーか」
「あの化け物がか」
「そうじゃ、見えているな」
また老婆に問うた。
「黒い蛇に似た化け物がおるな」
「ああ、その通りだ」
「今逃げていくぜ」
「追ってくれ」
そうしてくれというのだった。
「今からじゃ」
「これで第二ラウンドってわけか」
「そういうことだな」
二人はここでもかなり冷静だった。そしてだ。
「それで追ってそこでだな」
「決戦ってわけだな」
「うむ、そうじゃ」
老婆はまた話してきた。
「それでは頼んだぞ」
「ああ。しかし俺達の怖いもので襲い掛かってくるとはな」
「随分手の込んだ奴だよ」
二人はにこりともせず話した。
「それじゃあ行くか」

「それならな」
こうしてその怪しげな影を追っていく。影の動きは案外鈍くそのうえで廃棄された倉庫の一つに入った。今にも崩れ落ちそうな、シャッターも錆びているそんな倉庫だった。
影はそこに入ろうとする。二人はそれを追おうとする。しかしだ。
そのまま中に入った。シャッターは二人で蹴り飛ばした。
そのうえで中に入るとだった。そこはだ。
完全な廃墟であり中には廃棄された箱や錆びきったスパナや工場用品、そして割れたビンにコップ、そんなものが無造作に置かれていた。
そしてそれだけではなかった。二人の周りにだ。
それまで日も碌にささない暗鬱とした中だった。だがそこに白いものが出て来た。
白いフードと服を着ている。その服は牧師か神父のものを思わせる。色だけが逆だ。頭に被っているのは大きな三角のマスクだった。それが目だけを出している。目だけが不気味に爛々と輝いている。そうした者達が出て来たのである。
二人はその者達を見てだ。すぐにわかった。
「おいおい、今度はそれか」
「クランかよ」
「何が出て来たのじゃ？」
ここで老婆が携帯から問うてきた。
「今度は」
「クランだよ」
「それさ」
二人はやや無造作にこう返した。
「それが出て来たんだよ」
「わかるな」
「クランといえばじゃ」
老婆はそれを聞いてだった。それが何かすぐにわかったのだった。

話をさらに聞いてだ。その名前も言った。
「クー＝クラックス＝クランじゃな」
「ああ、例のな」
「その連中さ」
二人はわざと威勢よく笑って言ってみせた。
「あの連中が出て来たんだよ、今度はな」
「俺達の天敵だってことか」
「少なくとも意識はしておるな」
老婆は二人の刑事にこう問うた。
「そうじゃな」
「意識してない筈もないだろ」
「それも」
また話す二人だった。
「何せ俺達黒人全員をアメリカから追い出そうと思ってる奴等だからな」
「リンチだって何でもするしな」
所謂白人至上主義の団体である。その悪質な暴力活動はかつて深刻な問題となっていた。今でこそ活動はかなり下火だがそれでもまだそうした活動を続けているのだ。

第八章

「そんな連中で来たか」
「俺達が怖がってるって思ってるんだな」
「意識しているとしていないに関わらずそうなのじゃよ」
こう話す老婆だった。
「そういうことになる」
「へっ、ならだ」
「ここで恐怖を克服するってことか、またな」
「できるかのう」
老婆はこのことを問うた。
「それは」
「ああ、やってみるさ」
「やらないと事件が解決しないからな」
こう言ってだった。二人はまた拳銃を取り出した。
そのうえでクー＝クラックス＝クランの姿になっている彼らを見てだ。そしてだ。
また銃を放つ。それで再び一人倒す。
それを口火にして群がって来る彼等を次々に銃だけでなく拳や蹴りで薙ぎ倒していく。気付けば一瞬のうちに全員のしてしまった。
それで終わりだった。二人はここでまた携帯の向こうの老婆に話すのだった。
「おい、終わったぜ」
「これでな。全員倒したからな」
「ふむ。早いのう」
それを聞いた老婆は静かに述べた。
「もうなのか」
「こうした荒っぽいことは俺達の専門でな」
「軽いものなんだよ」

二人でそれぞれ言うのだった。
「だからな。こういうのはな」
「簡単にやれるさ」
「わかった。それではじゃ」
「それでは？」
「一体何なんだ？」
「マニトーは逃げるぞ」
二人への忠告だった。
「いいな、逃げるぞ」
「逃げる！？」
「また逃げるってのかよ」
「そうだ、逃げる」
二人に対しての指摘だった。
「間違いなくな」
「また蛇かよ」
「それでか」
「いや、そうとは限らん」
老婆が言うとだった。今倉庫の上の方にある小さな窓からだ。一匹の何か蝙蝠に似たまた漆黒のものが逃げようとしていたのだ。
その窓にはもうガラスもない。それは無残に割れてそこから小さな光が差し込んでいる。そこから逃げようとしているのだった。
「くっ！！」
「逃がすか！」
二人はすぐにその影に拳銃を向けて発砲する。しかしそれは間に合わなかった。
影はふらふらとであったがそれでも二人の拳銃をかいくぐりだ。そのうえで遂に窓から出てしまった。
そうしてそこから姿を消す。またしても逃げられてしまったのだ。
「もう無理か」
「逃げられたか」

「うむ、これではじゃ」
老婆もだった。諦めた声だった。
「どうしようもない」
「犯人逃がしたら何にもなりゃしねえじゃねえか」
「おい、婆さん」
二人は忌々しげに老婆に声をかける。
「今からいいか？」
「飛行機でも何でもいいから追っていいか」
「無茶を言うでない」
老婆はそれにはすぐに言い返した。
「幾ら何でもじゃ」
「忌々しい話だな」
「全くだな」
「しかしこの街にはもう二度と来ることはない」
老婆はそれは保証するのだった。

第九章

「絶対にじゃ」
「それは何でだ？」
「聞きたいんだけれどな」
「術を破られたからじゃ」
だからだと二人に言うのだった。
「それでじゃ」
「俺達が恐れるものを出した」
「それでも破られたからだな」
「左様」
その通りだというのだった。二人は老婆と話しながら倉庫の中を調べていた。とりあえず人間が行う犯罪に見られるようなものは見当たらなかった。怪しいものばかりが見えるだけだ。
ひからびた獣の毛に人のものには思えない牙のある髑髏にこれまた得体の知れないものが入っている鍋にだ。そんなものばかりがあった。
そうしたものを見回しながらだ。二人は言うのだった。
「俺達も確かに恐怖はあるさ」
「それはな。しかしな」
「しかしなのじゃな」
「それは克服できるからな」
「びびったけれどな。やってやったさ」
こう老婆に答えるのだった。
「それで結果としてな」
「悪霊は逃げたって訳だな」
「あんた達は本当に強いのじゃな」
老婆は二人に対して言った。
「自分達が恐れるものを倒せたのじゃからな」

「それで事件を解決できたっていうか終わらせられたのか」
「そういうことか」
「そういうことになるな。では事件は終わりじゃな」
老婆の声が落ち着いたものになった。
「マニトーが去ったからのう」
「今度来てもぶちのめしてやるさ」
「何で出て来てもな」
こう言う二人だった。
「何度でもな」
「それで今度こそ捕まえてやるからな」
勇者達は不敵な笑みを浮かべて言うのだった。デトロイトの奇怪な事件はこれで終わった。署長も二人からの報告を聞いて言うのだった。
「相手の恐れるものに化けて襲うか」
「ええ、報告させてもらった通りです」
「心を呼んで、ですね」
「まさに悪霊だな」
署長はここまで聞いて述べた。
「実際にいるとは思わなかったけれどな」
「そういう相手でした」
「逃げられたのは」
「ああ、それはいい」
署長はそれはいいというのだった。
「悪霊みたいなのはそう簡単に捕まえられないからな」
「だからですか」
「それはですか」
「そうだ。御苦労だった」
署長はあらためて二人に言った。
「では特別ボーナスと賞状を用意しておくからな」
「ええ、じゃあ今から」

「また行って来ます」
ボーナスや賞状の話を聞いても軽く笑うだけでだ。二人は何処かに行こうとするのだった。
「スラムの方でヤクの密売の話がありましたから」
「捜査に行って来ます」
「言っても無駄だろうが穏やかにな」
署長は一応注意もした。
「どうかな」
「それはできない相談ですね」
「俺達には俺達のやり方がありますから」
「全く。相変わらず荒っぽいな」
「じゃあ。ちょっとゴミ掃除に行きます」
「そういうことで」
署長の言葉をよそに外に出てだ。またしても派手に暴れる二人だった。だがそこには悪はなかった。荒々しいが確かな善と勇気があった。

マニトー　完

２０１０・５・１３

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5413n/

マニトー

2010年10月8日14時14分発行